

令和2年度 金光藤蔭高等学校 学校評価報告書

1 めざす学校像

<p><b>建学精神</b> : 我々が天地の大徳によって生かされ、家族をはじめ多くの人々の祈りによって育てられていることの自覚と感謝の念から発して、その自分を大切に、将来世のお役に立つ人間となって、世界真の平和達成と文化の発展のために貢献し、そこに生甲斐と喜びとを見出す人でありたいという念願に立って、教育の徹底を期する。</p> <p><b>教育方針</b> : 「学理求道」 確かな学問と豊かな人格を備え、大局観に基づく課題認識を持って、社会に有用たる生き方を求める人材を育成する。その人材を輩出することによって本校としての社会的責任を果たす。</p> <p><b>組織目標</b> : ① 生徒一人ひとりを大切にした教育内容と進路保障で応える学校 ⇒教育 ② 社会の変化や時代の要請に応じて常に改革・改善し続ける学校 ⇒経営 ③ 教職員一人ひとりの高い職業意識と組織力で業務遂行する学校 ⇒組織</p> <p><b>スローガン</b> : 「学びの場で、夢にチャレンジしよう！」</p>
---

2 中期的目標

<p>1 法人理念と教育目標の遡求 (1) 法人理念の徹底</p> <p>2 新型コロナ対応の取り組み (1) 臨時休業中の生徒対応 (2) 学校再開後の取り組み</p> <p>3 教育内容の充実改善 (1) コース内容の充実・検証 (2) 基本的学力の向上 (3) 生徒指導の充実 (4) 進路指導の充実</p>	<p>4 学校組織活動の充実発展 (1) 学校組織の活性化 (2) 組織と業務を通じた人材育成</p> <p>5 広報募集活動の充実強化 (1) 広報募集の強化</p> <p>6 創立100周年に向けて (1) 問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成</p>
---	---

【自己評価の結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価の結果と分析	
<p>自己評価アンケートの【アンケート】</p> <p>○生徒 &lt;令和3年2月実施&gt; 授業内容を中心に学校生活全般について全校生徒に調査した。(16項目)</p> <p>○教職員 &lt;令和3年4月実施&gt; 授業評価・生活指導・その他教育活動やコロナ禍での取組、学校改革の成果について検証した。(18項目)</p> <p><b>【分析】</b></p> <p>○生徒アンケートではほとんどの項目で約80%以上の生徒が肯定的な反応を示している。</p> <p>○教職員による自己評価では、「6コースのそれぞれが特色を生かした学習活動を実践した」と大半の教職員が実感している。また「校内研修や具体的な事例をもとにした問題解決型の業務を通して、教師力向上に取り組んでいるか」との項目でも80%を超える教職員が認識している。</p> <p>コロナ関連による学校休業期間中の学力保障や授業日数の確保についても、90%の教職員が十分に取組めたと認識している。</p> <p>今後も一人一人の生徒に寄り添った、丁寧な教科指導、生活指導を継続していきたい。</p>	
学校評価委員会からの意見	
学校評価委員 ①学識経験者：須田正信氏（大阪教育大学教授）②学校近隣防犯委員：新居見英夫氏 ③本校PTA会長：白井一行氏	
<p>1. 法人理念と教育目標の遡及 (1) 法人理念の徹底 (ア) 建学の精神については、「全校生徒の87%が心の教育を実感」しているとのこと。また、(イ) 本部参拝・感謝祭についても「94%」が学校行事として認識していることから教育目標については達成されているものと思う。</p>	<p>2. 新型コロナ対応の取り組み (1) 臨時休業中の生徒対応、(2) 学校再開後の取り組み (1) については、今般の新型コロナウイルス対応に学校は、感染防止等及び学習確保など様々に対応を余儀なくされたことであると思う。その中で、オンライン朝礼や臨時休業期間中の授業動画の配信・プリント教材などの対応をおこなっていたことから生徒及び保護者へ安心感を与えたと思う。(2) については、学校再開後の対応として個人懇談や家庭訪問を実施するなど丁寧に対応していた。また、生徒間や教員の感染防止対策に向けても努力がみられた。</p>
<p>3. 教育内容の充実改善 (1) コース内容の充実・検証：各コースの取り組み評価を見せていただき、どのコースも目標に沿って成果を上げている。(カ) のトップアスリートコースにおいては全国選抜やウインターカップ予選などで成果を上げていることから努力の跡がうかがえる。(キ) の課題のある生徒支援では、今後も適切な対応をお願いしたい。(2) 基本的学力の向上：基本的学力向上の取り組みでは、アンケートなどの取り組みを講じており、84%の生徒が満足を得ていることから細やかなサポートを感じる(3) 生徒指導の充実：生徒指導の充実については、アの転学者数は前年度より減少しており成果がある。遅刻者数は、前年度より少し増えているものの継続的に指導を行ってほしい。エの「生徒間トラブル」指導については、SNS での不適切使用の未然防止に向けた指導を継続してほしい。</p>	

3 本年度の取組内容及び自己評価

目標 中期的	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
法人理念と教育目標の遡求	<p>(1)法人理念の徹底</p> <p>ア 建学精神の遡求 心の教育を意識</p> <p>イ 本部参拝・感謝祭</p>	<p>(1)法人理念の徹底</p> <p>ア 建学精神を全ての教育活動の基として、「心の教育」を意識して、生徒・保護者への啓発に努める。</p> <p>ア 全人教育という観点から、「社会的自我」と「生きていく力」を育成することに努める。</p> <p>イ 新型コロナ収束・学校再開の時期によるが、毎年実施の本部参拝と感謝祭の実施の可能性を探る。</p>	<p>ア 式・行事での講話、学年・学級での指導、配付物等を通じて、金光教の教えをわかりやすく説明する。</p> <p>ア 天地・人・物への感謝を抱き、社会のお役にたつという「心の教育」を行う。</p> <p>イ 宗教情操教育の観点から、本部参拝と感謝祭については実施の可能性を探る。</p>	<p>ア 全校生徒の87%が心の教育を実感していると認識している。式や行事の他、学年集会や日々のホームルームでの指導が生徒に浸透しているようである。 また昼休みや放課後、神徳堂(お広前)を訪れる生徒も多く、宗務科教員との対話を通して心の癒しを得ている生徒も多い。</p> <p>イ 94%の生徒が学校行事として認識している。コロナ禍の影響で本部参拝を実施することができなかった。 感謝祭・宗教の授業の中で「日々生かされている」「世のお役に立つ人間になる」ことへの意識喚起を促すことができた。感謝祭では参列した3年生全員が、感謝の気持ちをもって日々の学校生活を過ごす決意を新たにした。</p>
新型コロナ対応の取り組み	<p>(1)臨時休業中の生徒対応</p> <p>(2)学校再開後の取り組み</p>	<p>(1)臨時休業中の生徒対応</p> <p>ア 健康面・生活面の確認と指導を行う。</p> <p>イ 家庭学習課題の提示と指導を行う。</p> <p>(2)学校再開後の取り組み</p> <p>ウ 生徒の心の安定と学校生活への適応に取り組む。</p> <p>エ 授業日数の確保に取り組み、年度初めの学習の遅れを取り返す。</p> <p>オ 健康確認と併せて、新型コロナの理解と予防について指導に努める。</p>	<p>ア 電話・web等で、健康面の確認と生活面の助言を、担任が定期的、継続的に行う。</p> <p>イ プリント教材や教科書等をベースにした学習課題や、授業動画等を積極的に作成し、郵送やweb配信等で継続的に提示し、進捗状況確認と指導を定期的に行う。</p> <p>ウ 担任・学年や生徒部が核となって、生徒との会話や仲間づくりに取り組む。</p> <p>エ 休日や長期休業期間の活用により、授業日数の確保を行い、学習の遅れを取り返す。</p> <p>オ 登校時の健康確認と併せて、感染症専門職から示された3密回避・ソーシャルディスタンス・マスク着用等、この新型コロナの理解と予防に努めさせる。</p>	<p>ア 臨時休業中において、担任は電話・web(ウェブでお知らせ)・オンライン朝礼等を行い生徒の健康確認及び心身の悩み等に丁寧に対応できた。</p> <p>イ 緊急事態宣言発出による4月から6月初旬までの臨時休業期間中において、プリント教材や約300本の授業動画等で生徒の学習保障に取り組んだ(教員90%)。また79%の生徒がプリント教材・授業動画に積極的に取組めたと認識している。課題の進捗状況等についてweb(ウェブでお知らせ)を使い保護者・生徒に定期的に確認し指導・助言できた。</p> <p>ウ 学校再開後直後の全生徒への担任による個人懇談の実施。または欠席が目立つ生徒への家庭訪問や別室登校・別室勉強会を実施した。</p> <p>エ 授業日数確保のため第2・4土曜日の休業日及び夏季・冬季休業日の約35日を授業日に振替えて授業日数の確保及び学力保障に努めた。</p> <p>オ 健康記録観察カードでの健康確認と登校時のマスク着用確認・手指消毒指導の徹底。 登校経路分散による登下校指導や分散学年集会、放送による始業式・終業式の実施。食堂内での飲食禁止、昼食時の黙食の徹底。 上記、感染拡大防止にむけて95%の教員が対策に取り組んでいると認識している。</p>

教育内容の充実改善「コース検証・学力向上・生徒指導・進路指導」	(1)コース内容の 充実・検証  ア 特別進学  イ ライフクリエイティブ  ウ エンカレッジ  エ ITライセンス  オ アートアニメーション  カ トップアスリート  キ 課題を抱える生徒 への対応	(1)コース内容の 充実・検証  毎年改革改善している6つの コースを、充実させながら進 行させる。  ア 特別進学については、 様々な学力向上施策を実 施して内容の充実を図り ながら、特別講習等の参 加状況の増加にも努め る。  イ ライフクリエイティブ・ ITライセンス・アート アニメーションについて は、専門学校との連携を 進め、内容を充実させる。  ウ エンカレッジについて は、具申書・高校生活カー ドや入学前面談等を充分 活用して、個別教育支援 計画の作成等を丁寧に行 う。 生徒との会話や家庭との 連携に力を入れながら、 基礎学力の補充と体験型 授業で指導の充実を図 る。  カ トップアスリートについ ては、6強化クラブの活 動実績のアップと学校生 活の安定に努める。次年 度募集を安定させる。  キ 課題を抱える生徒への対 応に、教務部(教育支援 係)と生徒部を核として 丁寧に取り組む。	ア 7時間目授業や進学講習等 により、新型コロナ対応によ り遅れた学習を取り返し、基 礎学力の向上を行う。  イ ライフクリエイティブ(ス ペシャリティクラス)を充実 させる。 専門学校との連 携により、生徒の関心に応じ た体験講座に力を入れる。  ウ エンカレッジ生徒の出席状 況・進級を充実させる。  エ ITライセンスでは情報関 係の資格取得を目指し、進路 に結び付ける。  カ 強化クラブの実績アップと 次年度募集を成功させる。	ア 特別進学コースは朝学習や放課後学習にも力を入 れ、基礎学力の徹底を図った。 特別講座や受験指導にも力を入れ「個別学習計画 書」を作成し、担任が学期ごとに成績や学習状況を 記録することで大学進学に向けた計画的な学習指 導を実施。  イ ライフクリエイティブコースは協力校である辻学 園、NRB 日本理美容専門学校に多数進学した。今後 もより強い連携を続けたい。 他の講座の内容も精査し、安定した入学者の確保 を図っていききたい。  ウ エンカレッジコース開設4年目、「学びなおし」を 募集のコンセプトに入れることで、入学者は前年 度を大きく上回った。 入学前面談実施や個別教育支援計画の作成に力を入 れ、担任・学年が中心となって粘り強い取り組み を実施し88%が進級することができた。3年生 は24名中22名が進学した。  エ ITライセンスコースは資格取得に向けて上級学 年の多くの生徒が2級以上の上位級を取得でき た。 また提携校である清風情報工科学院・大阪情報専 門学校に多数進学した。  オ アートアニメーションコースは目的意識をはっき り持った生徒の確保につながり、1年生は2クラ ス編成で行った。3年生は美術系やイラスト・声優 分野の大学、専門学校へ多く進学した。  カ トップアスリートコースは、コロナ禍の中、イン ターハイ及び各種大会が中止となりモチベーショ ン維持に苦慮しながらも柔道部が個人・団体が近 畿大会に出場、団体3位、個人3位以内入賞者4 名。 女子ソフトボールは大阪私学大会及び全国選抜大 会に準優勝、全国私学大会に出場。 男子バスケットボール部はWINTER CUP 予選ベスト 16。女子バスケットボール部は創部2年目で WINTER CUP 予選ベスト8入りをはたした。今後の 成長が大いに期待できる。次年度の募集も安定が 見込まれる。  キ 担任・学年は生徒の登校状況を把握し、早い段階 で教務部教育支援係等との連携で対応した。今後 もケース会議や認定会議を通して、具体的な個別 の支援策を迅速に打ち出せるよう連携を強めた い。 また保護者との交流会(COCORO 食堂)もコロナ禍で 1回限りの実施であった(保護者16、教員8名、 SC1名の参加)。また多くの保護者が必要性感 じている。今後も内容を一層充実させて継続し ていききたい。
	(2)基本的学力の向上  ア 全生徒への基礎基	(2)基本的学力の向上  低学力の生徒が多い。在籍 者全体の基礎学力底上げ	ア 時間割に設定した「学びたい む」を充実させる。	ア 「学びたいむ」では各学年・コースごとに「学びな おし」教材を工夫し、「基礎学力がついてきた」と 答えた生徒が80%であった。今後も3年間を見

<p>本の徹底</p> <p>イ 学習意欲のある生徒への特別対応</p> <p>ウ 研究授業の実施</p> <p>エ 生徒の授業評価</p>	<p>と、進学希望生徒の学力アップに努める。</p> <p>ア 基礎学力指導(HR)や授業の充実・工夫に力を入れる。</p> <p>ア 授業者への意識喚起と、管理職や学年部長による授業巡視を行う。</p> <p>イ 外部機関や人材を活用した学習場を質量ともに拡充する。</p> <p>ウ 授業改善や授業力向上に向けて精力的に取り組む。(研究授業・公開授業・研修等)</p> <p>エ 生徒による授業評価を授業改善に活かす。</p>	<p>ア 「眠らせない」「授業に集中させる」授業を実施する。</p> <p>ア チャイムに合わせた授業開始・終了を徹底する。</p> <p>イ 時間割以外の学力向上施策として、教員による入試対策講習、大学生アシスタントによる藤蔭塾(放課後の自学自習サポート教室)等を充実させる。</p> <p>ウ 教諭・常勤講師を対象として各教科で研究授業を実施する。</p> <p>ウ 公開授業を年間2回の期間を設けて実施する。</p> <p>エ 教諭・常勤講師全員が生徒による授業評価を実施して分析する。</p>	<p>据えた取り組みを計画し、生徒が達成感を感じるような教材の選定や授業作りを継続させていく。</p> <p>イ 放課後に実施した特別講習を受講した生徒の全員がその内容に満足している。また自学自習サポート教室(藤蔭塾)も大学生のアシスタントによるきめ細かなサポートのおかげで、生徒たちの学習意欲を高めることができた。</p> <p>ウ 公開授業・研究授業の実施後に各教科で検証し、授業改善につなげた。今後も継続していきたい。</p> <p>エ アンケートで「授業はわかりやすく、工夫がされているか」との質問に84%の生徒が満足を感じている。しかし、科目別担当者によっては課題が残る授業評価もみられたので、アンケート結果を教科内で共有し、振り返りシートを使って教員一人一人の課題克服・授業改善につなげた。</p>
<p>(3)生徒指導の充実</p> <p>ア 生活習慣・学習習慣の確立</p> <p>イ 欠席者・遅刻者の改善</p> <p>ウ 挨拶・マナー等の徹底</p> <p>エ 生徒間のトラブルや、生徒指導案件の改善</p> <p>オ 人権侵害事象の根絶</p>	<p>(3)生徒指導の充実</p> <p>生活背景や学習意識に課題を抱えて育ち、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒が多い。</p> <p>ア 生活習慣・学習習慣や自尊感情の醸成に力を入れて、出席状況や授業態度の改善に取り組む。</p> <p>ア 転退学者数の改善を継続して行う。「3年間お預かりして育てる」「社会のよき構成員として世に送り出す」という使命感を大切にす。</p> <p>イ 学級経営の充実を図り、「欠席しない・遅刻しない」登校したくなる学級集団の構築に努める。</p> <p>ウ 服装の乱れや挨拶ができない生徒が多い。登下校時、ホームルーム、授業開始・終了時の挨拶習慣化とともに、外来者に対する挨拶を励行させる。</p> <p>エ クラブ加入率を上げ、部活動を通して、集団での協調性・規範意識や向上心を育てる。</p>	<p>ア 転退学者を減らす。 H29→54名 H30→48名 R01→61名 さらに改善に努める。</p> <p>イ 遅刻者を減らす。 H29→8008件 H30→4019件 R01→5222件 さらに改善に努める。</p> <p>イ 朝の立番指導を行い、始業時刻前後に登校する生徒に間に合おうとする意識を芽生えさせる。</p> <p>ウ 望ましい服装・髪色・身だしなみや、挨拶を徹底させる。</p> <p>ウ 登校指導・下校指導に力を入れ、挨拶や服装の指導を徹底する。</p> <p>エ 生徒指導案件を減らす H29→102名 H30→56名 R01→62名 さらに改善に努める。</p>	<p>ア 転学者数 H29年度→54名(6.67%) 転学21退学33 H30年度→48名(6.23%) 転学23退学25 R01年度→61名(7.43%) 転学34退学27 R02年度→49名(5.56%) 転学35退学14</p> <p>令和2年度の転退学者率は昨年より減少し5%台となった。転退学者の約70%は「不登校」を含む「学校生活学業不適応」や「進路変更」が理由である。入学生が多くが小学・中学時に家庭的、経済的、学習的に多くの課題を抱えている背景があることは否めない。アンケートで「生徒の心身の悩みに先生が丁寧に対応しているか」という質問には82%の生徒が肯定しているが、生活習慣未確立や学習習慣のない生徒の自尊感情の醸成にさらに力を入れ、出席状況や授業態度の改善に取り組みたい。</p> <p>イ 年間の遅刻者総数は在籍数比で昨年より若干増えた。遅刻者は翌日に早朝登校させるなど、学年や生徒部が中心となって今後も継続的かつ粘り強い指導を続けていく。</p> <p>ウ 84%を超える生徒が「ルールを守り、挨拶もきちんと行なっている」と答えている。いろいろな場面での挨拶指導が浸透してきている。</p> <p>エ 最近増えているSNSの不適切な使用による事案があり、全体の生徒指導案件は27件で、昨年より減少した。HRや学年集会で今後も注意を呼び掛け、事案を未然に防ぐよう継続して指導していく。</p>

		<p>エ 高校生らしい友達関係の構築が難しいケースがある。コミュニケーション能力を高め、望ましい対人関係を身に付けさせる。</p> <p>オ 社会規範や行動に対する判断が難しい生徒が多い。生徒間の人権侵害事象は起こさない。</p>	<p>オ 人権侵害事象はゼロを目指す。</p>	<p>オ 人権侵害事象はゼロであった。</p>
	<p>(4)進路指導の充実</p> <p>ア 進学実績の向上</p> <p>イ 望む職業への就労実現</p>	<p>(4)進路指導の充実</p> <p>ア 大学・短大・専門系学校への進学実績を向上させる。</p> <p>イ 卒業段階での未進学者・未就労者の数を減らす。</p>	<p>ア 大学・短大・専門系学校全体の進学者を前年度よりアップさせる。</p> <p>ア 四年制大学進学者も前年度よりアップさせる。</p> <p>イ 未進学者・未就労者を前年度より減らす。</p>	<p>ア 全体の進学率は令和元年度の76.3%から77.6%とほぼ横ばいで、大学進学率は昨年度の33.9%から38.3%へと微増し、専門学校割合が微減した。</p> <p>イ 進学希望者の中での未決定率は浪人希望を含め0.5%、就職希望者の中での未決定率も0.5%で、昨年度より下がった。進路未決定者0を目指し、今後も粘り強い進路指導を継続していきたい。</p>

<p>学校組織活動の充実発展</p>	<p>(1)学校組織の活性化</p>	<p>(1)学校組織の活性化</p> <p>ア 組織的・機動的な学校体制の確立と経営教科指導やクラブ指導は専門性が必要で、学年や分掌組織は組織力・機動力・実行力が必要である。それぞれが、連携を密に活発な業務活動を展開する。</p> <p>イ 熟慮判断を旨とするが、フットワークとスピード感を持った業務展開をして、生徒と触れ合う時間を確保する。</p>	<p>ア 準専任教員・常勤講師の任用を厳密に行い、教員全体の力量アップを行う。</p> <p>ア 適性を配慮した人事配置を行う。</p> <p>イ 教諭・常勤講師と様々な場面で時間をかけた会話をを行う。</p>	<p>ア 今年度、準専任教員選考には5名の常勤講師が臨み、2名が任用となった。常勤講師は任期満了者に代わり、新規に9名を採用した。生徒の学習指導や教育活動に熱心に取り組む教員の採用に今後も全力を尽くす。</p> <p>ア 校務分掌は、今年度より業務分担の見直しにより、7部体制から4部体制となった（教育支援部は教務部に、研究研修部は進路部に、入試広報部は総務部にそれぞれ統合。）それに基づき担当教科や本人の適性を考慮して人事配置を行った。「教職員の適性・能力に応じた校内人事や校内分掌が行われているか」について、アンケートでは81%の教職員が肯定している。</p>
	<p>(2)組織と業務を通じた人材育成</p>	<p>(2)組織と業務を通じたミドル層の育成</p> <p>ア 管理職や分掌組織の組織的業務を通してミドルリーダーを育成する。</p> <p>イ 課題山積の学校である。様々な学校課題を提示して、課題解決型の業務を展開し、学年部長・分掌部長等を活かしてOJTで育てる。</p> <p>ウ 私学は教員の研修機会が少ない。大阪府教育庁や、大阪私立中学校高等学校連合会、私学マネジメント協会等</p>	<p>ア 管理職や校務運営委員会メンバーを含めてミドルリーダーの層を厚くする取り組みを行う。</p> <p>イ 学年部長・分掌部長に企画提案型で業務を遂行させる。</p> <p>イ 重要な学校課題を提示して、課題発掘・解決型の業務を実践させる。</p> <p>ウ 人材育成の観点で、進路部（研究研修係）を通じて、適切な人材を外部研修会等へ積極的に出席させる。</p>	<p>ア 4部での仕事を学校全体として機能させる分掌長、主任を配置し、教頭補佐（分掌長兼務）を学校運営の要を担う人材として育成した。</p> <p>イ 新任の常勤講師対象の研修を充実させ、学年部長や分掌長が中心となり学級経営、生活・学習、学校業務に関する細かい指導を行った。ミドルリーダーはまた日々の業務から重要かつ、最優先の学校課題を見つけ出し、速やかに改善策を考え実践するよう努めた。教員の81%がその取り組みを認識している。また進路部（研究研修）が様々な校内・校外研修を提示し、若手教員も積極的にそれに参加し、自己研鑽力を高めている。</p>

		が主催する研修会を積極的に活用する。		
広報募集活動の充実強化	<p>(1)広報募集の強化</p> <p>ア 組織的な広報展開</p> <p>イ 外部広報のアピール力アップ</p> <p>ウ 入学生徒の確保</p>	<p>(1)広報募集の強化</p> <p>ア 入試広報部の組織的な広報展開</p> <p>イ 外部広報のアピール力アップ</p> <p>ホームページや学校案内・冊子等を生徒・保護者・中学・塾等に受け止めやすく、わかりやすいように改善する。</p> <p>ウ 入学生徒の確保</p> <p>令和3年度入学者を安定して確保する。本校を対象とする生徒層を本校の「学校体制」と「教育内容」で丁寧に3年間育て上げるということで、生徒・保護者・中学・塾等の外部評価を得る。</p>	<p>ア 中学校長経験者4名の人材を活かした、担当地域を意識した広報展開を行う。</p> <p>イ 利用しやすいホームページ、わかりやすい学校案内を目指して、さらに改善を加える。</p> <p>イ 広報媒体の完成・配付を早期に行う。</p> <p>ウ 令和3年度に令和元年度並み(約320名)の入学者を確保する。</p>	<p>ア 中学生・保護者対象のオープンスクールを3回、入試説明会を4回、中学校教員や塾向けの説明会もそれぞれ実施した。</p> <p>初めての取組としてエンカレッジコース対象の個別相談会を実施した(相談実人数164人、内59名がエンカレッジコースを受験、25名が他コースを受験)。学校紹介DVDや各コースの体験授業にも改良を加え、参加者は昨年度より増加した。</p> <p>イ 学校案内冊子の発行を早め、中学校への速やかな広報活動を開始した。ホームページは中学生や保護者によりわかりやすい内容にし、学校行事等もタイムリーにアップするよう努めた。</p> <p>ウ 「エンカレッジコース」は不登校生徒に限定せず、広く「学びなおし」を必要とする生徒にも募集を広げ、外部に積極的にアピールすることで昨年同様の入学者を確保し、3クラス編成とした。その結果、平成25年度以来300名を超えることがなかった入学者数は、令和元年度329名、令和2年度357名、令和3年度入試は中学3年生人口が激減する中で317名の入学が確定した。今後も安定した入学者確保を目指したい。</p>
創立100周年に向けて	(1)問題解決型・未来志向型の学校風土の醸成	(1)大局観による未来志向型の学校風土	様々な学校課題に、連帯感を持って、前向きに取り組む、学校の一体感を醸成する。	一人一人の生徒に誠実に真摯に向き合い、保護者との連携をさらに深め、教職員が魅力ある学校づくりのために日々研鑽に努める。